

初年次導入教育としての入門実習が学習意欲をもたらす要因の探索

○武田 直仁¹(¹名城大薬)

【目的】本学では初年次導入教育のひとつとして4回の入門実習を行い、実験・観察を通じた科学観の涵養、学習の動機づけ・学習意欲の維持などをねらいとしている。事後アンケート調査において、「くすりの剤形」を題材とした入門実習の学生満足度は高く、過去4年間の肯定的評価の平均比率は8割を超える。今回、その要因を因子分析や自由記述の分析から探索した。

【方法】1時限目に目的・意義などの導入講義を行い課題が与えられる。2時限目にSGL(4名/班)で実験方法やそのためにどんな器具・試薬が必要かなどを考え、実験計画を立案する。3時限目に課題を解決する実験方法について発表をし、4～5時限目に自分たちで考えた実験方法で仮説が証明できるか検証実験をした。成績評価は受講態度・レポート採点とした。

【結果及び考察】16質問(5件法)を分析対象とした主因子法による因子分析(プロマックス回転)を行い3因子の最適解を得た。抽出された3つの因子を「学習者の取組み態度」、「学習者の教員評価」、「学習者の受講満足度」と命名した。これら3つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示し、「教員の熱意・親しみやすさ」がSGLでの「積極的な参加」を促進し、「薬学への興味の変容」に繋がったことが示唆された。3つの下位尺度得点が、学生のレポート点数の平均値より低い成績であったものを低値群、平均値より高い成績であったものを高値群として t 検定を行った。その結果、学習者の「取組み態度」下位尺度($t(258) = 0.161, n.s.$)と「教員評価」下位尺度($t(259) = -1.34, n.s.$)については、レポート点数差は有意ではなかった。「受講満足度」下位尺度($t(259) = -2.23, p < 0.05.$)についてはレポート成績上位の方が有意に高い得点を示した。